

## 秋の浄瑠璃寺にて

藤原 道夫

またも浄瑠璃寺にやってきた。

春訪ねた時に貰った寺の冊子に次のように書いてある「東の如来“薬師”は過去世から送り出してくれる仏、・・・遠く無限に続いている因縁、無知でめざめぬ暗黒無明の現世に光を当て、さらに苦悩をこえて進むための薬を与えて遺送してくれる仏である・・・」。これまで得た知識とちがっている。三重塔の秘仏・薬師如来は毎月8日好天の際に開扉されると知り、11月8日に賭けてまた訪ねようと計画した。幸いにも小春日和に恵まれ、岩船寺から当尾の石仏を見ながらやま道を下り、昼ごろ浄瑠璃寺前に辿り着いた。

小さな山門をくぐると、以前に変わらず静寂な別世界に入った感覚に包まれる。遠回りして池を巡り三重塔に向かう。薬師如来を拝観して塔の前に立つと、池を挟んで本堂（九体阿弥陀仏を収める）を望む浄土式庭園とよばれる平穏な風景が広がる。西方の阿弥陀仏を拝むことにより、誰しも極楽浄土に導かれるという浄土信仰を具現した風景だ。

「浄土とは Wahn 妄想に過ぎない」と言う同級生 M 君の声が聞こえるような気がした。彼は1年生の秋、重要とされる「解剖学実習」に途中から出て来なくなった。1か月余りたってひょっこり顔を出して語るには、「クリスチャンとして信仰と礼拝のあり様について迷いが生じ、その道の大御所の意見を聞きながら考えていた。結論として宗教は Wahn の連鎖で成り立ち、都合のよいように組み立てられている」という。彼の表情は晴れ晴れとしていた。

浄土信仰は末法に入った平安末期に災害・疫病・飢饉に苦しむ人々の間に広まった。この世は穢土であり、極楽浄土への来迎が救いだっただ。その思いは Wahn であろうと、安らぎをもたらす信心として認めざるをえない。一方釈迦は「人それぞれに良い素質を持ち、それを現世で生かすことこそ大切だ」という趣旨を説いている。これは信じたい。また、現世での功德・悪業は来世に持ち越されるとする考えもある。それが Wahn であろうと、妥当ではないか？ 浄瑠璃寺の浄土式庭園に身を置き、あれこれ思い巡らす。人は何処に行くのだろう。

陽が傾いてきた。所々で紅葉が映え、本堂脇のたわわに実る柿が赤みを増してきたようだ。